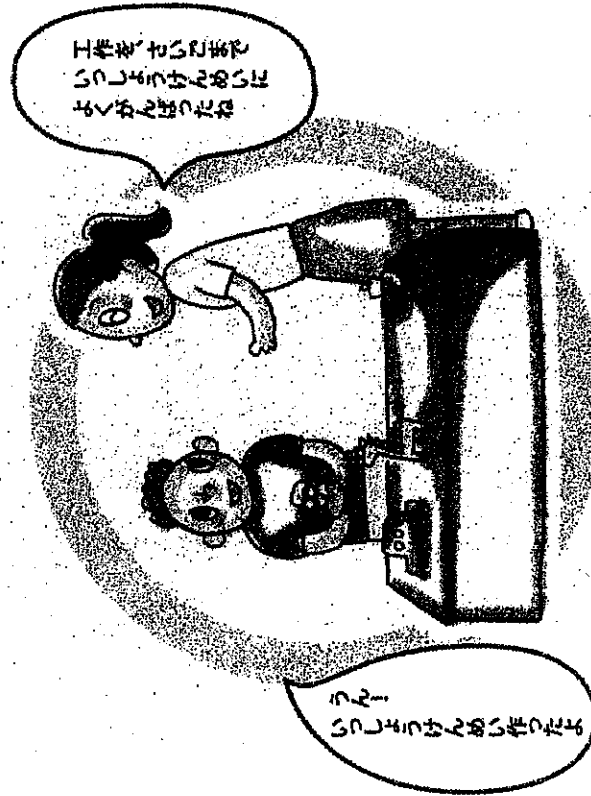


特別支援だより No.11

令和3年6月28日（月） 特別支援教育コーディネーター 松田敦子

不器用な子

『普通』という枠を外してみると、不器用な子かもしれません。
「なんでいつもふざけているの」と叱るよりも、子どもが今できていること、頑張っていることを認めてあげることが大切です。



本人の気持ち

いっしょうけんめい やったことを、ほめられてうれしな またやりたい



親の気持ち

上手にできなくても、その子なりのがんばりを認めてあげることが 大切なんだね

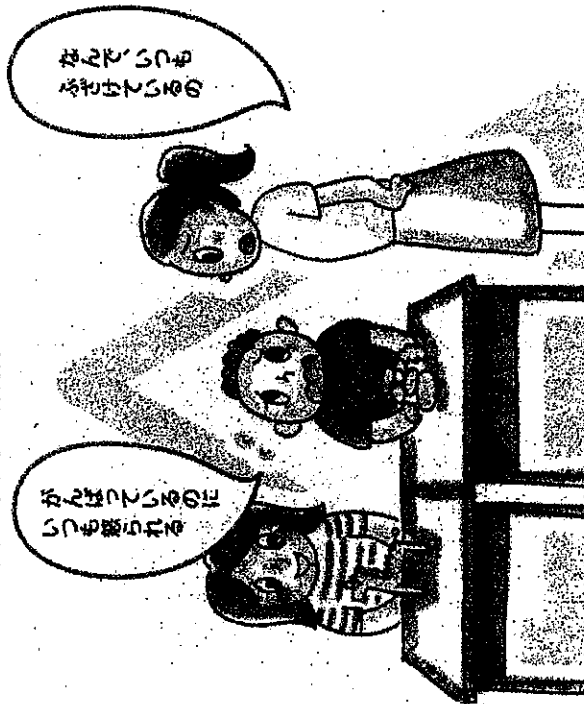
POINT!

失敗したいという子はいないので、うまくいかなくても「残念だったね」と共感してあげる。ことが大切です。がんばっていることや、やろうとしていることをほめてあげること、少しずつやれるようになっていきます。こういう関わりで自己肯定感を育てていきましょう。

雑でいいかげんな子

発達が遅くなったら⑨

『普通』という枠で比較してしまうと、大ざっぱでいい加減で、不真面目な子と厳しく評価されることが多くなります。



本人の気持ち

ふざけているんじゃないよ うまくできないから いらいらするんだ



親の気持ち

どうしたらいいの？ どうすれば、頑張れるのかしら？

POINT!

雑でいいかげんに見える子は、わざとそうしているのではなくて不器用（手先、体の使いかた、人間関係など）でうまくいかなくて本人も困っているのかもしれない。「なぜ、できないの」と叱るよりも、がんばっていることや今できていることを認めてあげることが必要

たんのほの
のけす



當眞正太

「困り感」から考える

私が小学生のころ、ムキに癡な書きのないうちがいた。教壇を歩き回ったりの癖に廊下くねり出したりする子もいた。よくしゃべる子や、友達の気持ちを想像できず嫌なことを言ったり、状況にそぐわない発言をしたりして、先生を困らせる子もいた。あの子どもは、いわゆる注意欠如・多動性障害や自閉症スペクトラム障害だったのだと思う。

ムキムキが取り上げられるように、発達障害という言葉を認知されるようになってきた。それと同時に、少し変わった子や個性的な子に、安易に発達障害というレッテルを貼ってはいないだろうか。

もちろん、親で悩んでいる、発達障害と診断されることで脳の機能障害だと分かり、親のしつけや育て方の問題ではなかったと知る心が安心につながる場合があるので、それは大切なのだと思う。一方で、周囲の大人が発達障害の疑いがあるよ気をつけて受診を勧めたり、障害だけを見て支援の方法を考えたりする風潮は好ましくないと思う。

大切なのは、発達障害をレッテルとして捉えるのではなく、子どもの「困り感」から考える視点。その子が何に困っていて、どんな支援があれば困り感が減るかを考えることである。

私が小学生のころは、発達障害という言葉を知ったことがなく、今のよほど研究されている時代だった。当時のムキムキの先生は、立ち歩きが多い子には、トヤブリントを配る係を任せていた。また、おしゃべりが多い子には、「声の大きさを目標」というムキムキの指示物を使い、その子に話して制限し、風潮が控えられるような支援をした。こうした支援の工夫があることで、少しも困り感を減らしたことはあるのだと思う。

(特別支援学校教諭)